

プロ用イヤーマニターの新スタンダード誕生

# ソニー MDR-EX800ST 開発ストーリー

取材・文・武者良太 Ryota Musha



(株)ソニー・ミュージックコミュニケーションズ、レコーディングエンジニア篠筒 孝さん。

世界中のレコーディングスタジオで活躍しているヘッドフォンの一つに、ソニーのMDR-CD900STがある。コンシューマー市場でも長らくリファレンスとして捉えられてきた名機だ。そんなMDR-CD900STに、MDR-EX800STという兄弟が誕生した。MDR-EX700SLをベースとして開発されたカナル型で、ソニー・ミュージックスタジオに設置されているラージモニタースピーカーの音をインナーイヤードで再現できるようにとチューニングされたという。そこでこのモデルを監修した、ソニー・ミュージックコミュニケーションズのレコーディングエンジニア、篠筒 孝さんにお話を伺った。

開発期間は3年に及んだ

「レコーディング中、僕らレコーディングエンジニアはアーティストの皆さんにどのように歌ってほしいか、また演奏してほしいかを伝えます。その時、彼らが耳にしているヘッドフォンの音色がモニタースピーカーのトーンと異なると、こちらの意図が伝わらなくなってしまいます。実際に従来のイヤフォンは色づけがされていたり、また耐久性の面でも現場では使えないものばかり。だからといって、いちいちブースの中から出てきてもらってラージモニターで音を聴いて、またブースの中に入って演奏してもらう……というの

では時間がかかるだけです。僕らとしても困っていたそのとき、ソニーからMDR-EX800STの企画が上がり開発に協力しました」同モデルの開発期間はなんと3年にも及んだという。「最初にソニーエンジニアリングの技術者が作成した、8機の手作り試作機から聴き始めました。しかし開発途中でマイナーチェンジを繰り返すので、この時点でもかなりのモデル数をチェックしましたね。音の方向性が固まってきた段階で、次に金型を起こすための試作機のテストに入りました。しかし最初に煮詰めたサウンドバランスとは違う音になってしまったので、また1から様々なバリエーションの試作機を作ってもらいながら試しましたがどうやっても同じ音にならない。そこで金型を作ってからテストを行ったほうが完成度の高い商品になるだろう、ということで、ハウジングを決めた状態から、再度1から作り込みました」そして、無事に合格点を上げられるモデルが完成。

1台1台顕微鏡で見ながら作るハンドメイド品

しかしここでも問題が発生した。「普通のヘッドフォンの生産ラインだと、個体差により音にばらつきが生じてしまうそうなんです。というかそれまで僕が指摘していた試作機ごとの音の差は、まさに個体差そのものだったという(笑)。しかしモニターとしても使う製品である以上個体差があってははいけません。そこで工場の中の人に多くの量産用試作機を作ってもらって、できあがりにブレがな



MDR-EX800ST ¥25,200

い人にマスターとなってもらい、ほかのエンジニアを指導してもらうことになりました。結果、量産されるMDR-EX800STは「いずれも同じ音を出力するようになりました」ということは、MDR-EX800STは手作りでメイドインジャパンの品なのだろうか。そう尋ねてみると、「僕も最初はライン生産だと思っていたんですよ。でも実際は1台1台、エンジニアが顕微鏡で見ながらパーツを組み立て、測定器で測って作っているハンドメイド品なんです」という。職人の手作業だからこそできる、製造品質の統制。シビアな管理工程を経て生まれる製品だけに生産数に限界があるそうだ。「だから今、MDR-EX800STの数は全然足りてないんです。実は我々もまだ持ってないんですよ(笑)」。

### プロだけでなく一般の音楽ファンの方にも聴いてほしい

ここでサンプル機のサウンドを聴かせていただいた。曲はマイケル・ジャクソンの「Smooth Criminal」。最初にラージモニタースピーカーで鳴らし、その上でMDR-EX800STの音を耳にしてみる。驚くことに、確かにラージスピーカーが生み出す圧倒的な量感の低域を高いレベルで再現して

いる。特に30~50Hzのリニアリティが秀逸だ。この音域の音階も手に取るように伝わってくる。また中高域にびても粒立ちが良いダイレクトなサウンドで、音圧の変化に対してビビッドに反応する。「ナチュラルなサウンドなので制作者が意図した音を素直に聴けますし、また一般の方々にも聴いてもらえたら素晴らしいな、と思いますね」なおMDR-EX800STには2種類の硬度のシリコンを組み合わせたハイブリッドイヤープースが付属する。サイズはS/M/Lの3種類だが、MDR-EX600やMDR-NC300Dなどのモデルに付属するSS/MS/ML/LLのハイブリッドイヤープースも使用できる。「人によって、左右の耳の穴の大きさが異なるんですよ。ゆるいイヤープースだと空気の漏れによる低域の減衰があり、きついとブーミーになるので、左右のイヤープースをそれぞれ交換して細かく調整できるようになっています」具体的には装着して曲を聴き、ブーミーさが抑えられるサイズのイヤープースがベストサイズ。自分の身体に合わせて、自分だけのセッティング・チューニングをしたい方は、ソニーサービスセンターで7サイズのハイブリッドイヤープースを注文できるそうなので是非試していただきたい。

## 1/3PR オーディオユニオン